



年 刊 歌 集

1986 年 版

日 本 歌 人 ク ラ ブ

版 権

昭和六十一年十二月十日印刷 定価四、〇〇〇円
昭和六十一年十二月十五日発行 (送料共)

年 刊 歌 集 一九八六年版

編集者 渡 辺 於 兔 男

発行者 水 上 正 直

発行所 日本歌人クラブ

〒一五六 東京都世田谷区赤堤
二―三九―一二
電話 (三三五) 一九九三(代表)
振替 東京 八―一三二七四番

印刷所 日立印刷株式会社
東京都千代田区内神田三―十一―七

年 刊 歌 集

一九八六年版
日本歌人クラブ編

目次

あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	し	す	せ	そ	た	ち	つ	て	と	な	に
.....																					
五	元	セ	ハ	ハ	二	一	一	一	一	二	二	二	二	二	二	三	三	三	三	三	三
ぬ	ね	の	ひ	ふ	へ	ほ	ま	み	む	め	も	や	ゆ	よ	ろ	わ	補遺	出詠者住所録	後記		
.....																					
六	七	八	九	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一	二	三	四	五	六	七	八	九

装画・今井繁三郎
出詠・二、二七四名
歌数・一、三七〇首
*印・新仮名遣い

安部匠司

生 別

九官鳥に餌をやり別れ出でてゆく妻よ購罪の旅とし思へ

持ち去りし妻の簞笥の跡青し冬の極みの光が隈取る

病院に生死分たぬわれ措きてせし背信は今に続くを

無人駅に下車して詣る谷津墓の母に告げなむ離婚せしこと

生別を現としつつ還るなき妻帯の日が吾をさいなむ

安倍 環

本を商ふ

古稀にして妻と創めし書舗なれど恙も無くて日日を商ふ

商ふはおほむね大衆誌なるゆゑに気楽に構へて客を迎へる

若き娘がエロチズムなる女性誌を求めゆきたり躊躇もなく

込み合へる若き顧客の肩越しに横文字書きの新書を見出づ

誇るべきもの何もなく老ゆれども衰ふるなく書舗を営む

安倍美代子

五 首

いづくより来し若者と思ふほど成長したる孫と居並ぶ

高齢化社会といふも諾はむ嫁の髪にも白きもの見ゆ

藤蔓は虚空にのびて巻き戻るものなきあきらめに似て

常夏の国の明るさ思はせて真紅のサボテン大きくひらく

瀬戸内の大夕焼を前にして夫とわたしの影の小さき

安藤佳光

* 誕生日

ホワイトチョコ、ホワイトデーも知らず来て八十一歳今日誕生日

承らえて愛の一生を確かめん長寿日薬有功賞を受く

大島の黒き砂漠のあしたばや陛下召されしとう足とめて見つ

夏の棉燕脂の花芯つばらかに機織る母のまばろしに頭つ

高蛋白低カロリーの棉の実よ健康食品のニュースめでたし

あんどうさきこ
安藤佐貴子

曆 春

初詣でも年賀も常の衣服にて変りばえなく年
代りたり

去年今年忙しく過ごし山に来て心を放つけふ

山始め

早寝せし夫に代りて宵暗に鬼やらふ豆思ひき
り撤く

近隣に少し羞らひ口ごもる追難のこゑを鬼も
笑はむ

山始めも追難の行もわが為してふさはしきま
で女古りたり

あんどうひこさぶろう
安藤彦三郎

南紀にて

熊野灘に金の光の射しくれば朝陽は昇る昇り
はじめたり

熊野灘に光の雫垂らしたり 朝陽水平線を離
れし瞬間

遠西熊野の海の夕風に漁り火いまだとみに薄
れぬ

虚空より噴き出でたぎち那智の滝とどろき落
ちる身心脱落

ふたたびは来るの無きかと思ひぬしに青岸渡
寺に登り着きたり

あんどうひろし
安藤 寛

阿蘇の五岳

草千里隔ててなびく火の煙冬の五岳は晴れわ
たりたる

冬茅のす枯れてなびく草原に牧場の柵は遠く
囲める

月光の草原遠く隔てたる阿蘇の五岳は暗く連
なる

日の射さぬ裏中岳の草斜面飼ひ放たれし馬馳
登る

日の射してバナナ林の葉の青む道にしたたる
露の音あり

あんどうみさお
安藤美佐保

* 五 首

スコップのさき打ち当る鉱質音凍てし土より
弾き返さる

幽明を画せる母とわれの峽埋めんとして雪は
降りつぐ

白きビル建ち並びつつ風堕ちてま昼の首都の
化石めくなり

広浦湾の岸近くモーターボートすぎ俄かに潮
の香の迫りくる

工夫らの黄のヘルメット陽を反しサンダルの
跡きやかに秋

足立三郎 * 私的ゆえ

長兄も次兄も死にきかにかくにふるき仏壇を
背負いきたりし

足立家の世継ぎを妊み産ましけるわが家の嫁
よいますこし威張れ

足立氏の私的短歌は私的ゆえすこしもお国の
ためとならずき

人生を「金と女」とは断じがたき意志薄弱が
身にしみるなり

老残のわれらを放れせつくすのまだ丈夫なる
きみらにまかす

阿部昭子 三日月

白木蓮花びら一つたちまちに連鎖しておつ姑
病めるとき

一ヶ月苦しみ喘ぐ姑上の御手とればうつくし
年輪ありて

眼球の底ひに泌みる紫の色の輪にじむすみれ
花壇は

きりきりと胸に泌みくる傷みあり肉体の傷に
あらず深まる

くれなづむ空に初冬の色ひきて三日月はひと
のこころうつしぬ

阿部英子 * 如月

もの言えは君ハリネズミ菜の花に如月尽の雪
あられふる

ふるさとの杉山墓に冬鳥祖のかなしき言葉を
吐けり

こころまで氷雨のしみてたたむ傘わが名に淡
く門の灯点る

テーブルにバナナ食べおき宮殿を逃れしマル
コス首相のその後

鳩時計つりがね時計デジタルも止りてわが家
の冬眠醒めず

阿部キミ 北上川源流

神々の息吹にも似て湧き出づる北上源流波紋
休みなし

岩手山尾根の雫の寄るところ源流となりて谷
に湧き出づ

北上川源流の泉に漂へる山の気波紋となりて
休まず

啄木の故里の思ひ身近なり北上源流の靈氣に
触れて

吊橋を渡るは遠き日の如し啄木の歌碑を見上
げては立つ

阿部君子 * 福寿草の花

福を呼ぶ花なりと知り病むわれに夫植えくれし福寿草咲く

黄の色のなんとゆかしき花なれや日日にふえ

ゆく花数たのし

苦しみのようやくさりし安らぎに楚々と咲く

花まこと美し

やさし言葉つねに言わざる老い夫のわが病む

そばに日毎看取れる

過ぎゆきの幸せなりし夢つなぐ夫丹精の花庭

をつつめり

阿部秀一 * 心象

弔ひもなくて流れてゆく魚を鷗の群もつえば
むとせず

いづつ辺の鐘にてあらむ明時を聞ゆることあり

聞えぬことあり

菩提樹のま白き花の咲きたれば吾の小さき仏

も乗らむ

裁かるるその日のごともさびしくて狸々袴実

となりて揺る

たまきはるいのちの底ひ吹雪してわがうつし

身の歌狂はしむ

阿部文子 五首

十八となりたる娘お下りの晴衣は母より板につきあ

柔かに霧を浮かべて箱根山南面と世界見惚れて止まず

はれゆけば霧の底ひにひそみるし湯の町灯り

星とまたたく

運転免許とりし十九の孫むすめと花野めぐれ

り春を描しみて

あぢさゐの初花灯るぼんぼりに似たるを供ふ

夫の命日

阿部十三 野径

杜かげの冬の野の径騒がしき鵲の鋭ごゑもう
つつ世のこゑ

職退きておのづからなる逼塞とみらるるもよ

し背を伸し歩む

花芽いつかふふむ萩叢この径のここのあたり

と記憶しおかむ

先さきは考ふるまじ寝ね際のふたりがたりの

落ち着くところ

生きて還ると思はざりしを今更に言ひて何せ

む訊かれもせざる

阿部米子

早春

幾日を気配見せゐし白梅の雨水の朝をひらく
一輪

漸やくに開く豊後の梅一輪花には花の愁ひあ
るらめ

菜種梅雨止む田の道に幼児の数へ切れざりた
んぼの花

庭草をひく手止どめて一輪を剪りて給ひぬと
き色椿

はすかひに影を揃へてしづかなり芽吹きに早
き落葉松樹林

會津 恕

五首

更くる夜も風衰へず並木路の落葉いづこの方
へ吹かれむ

うす紙に頭包める白菊を活けなとほどく其の
うす紙を

菜の花をうでし残り香厨辺に匂ふと云ふもあ
えかなるかも

二度寝の短かき夢に今朝逢へるいづれも早
在らぬはらから

大夕張石炭坑爆死者あな哀れ父子三人の中の
末の子

相沢一好

いくひらか雪

かぎりなく灰色の空ひくくしていくひらか雪
空に触れて消ゆ

充ちてくる潮のごときを待つ刻も孤独のなか
を雪は降りつく

ピレモンへのパウロの書きし小書簡 愛にか
かはり雪の日をすぐ

モーツアルト夜のテレビに奏でられ雪やみて
いま静かなる夜

両の手を組みひそかに祈りゐる一人の部屋
にぬくもりながら

相沢東洋子

いのち

よせ鍋のふきこぼれたる音のしてここより春
のいのちちかづく

あまえびのほのあたたかし 灯の下にちりぢ
りなりし顔のよりあふ

まないたに水を流して夜のふくる 春の雪こ
む冷えし厨に

草かげにすみれの芽ぶきはの見えて亡父の遺
せる春のひろがる

人間のいとなみよりもくきやかにすみれは春
のいのちを歌ふ

相沢友子

伊豆の野山

もみぢ葉の散りしく坂を登り来て明日を憂へ
ず老いなむ念ひ
すき穂の白きがゆるる野の路に独りの心保
つしばらく
美しき秋のひと日に今日会へり空透明に山の
上なる
茶の席に挿さむと友はくろもじのすでに黄葉
する一枝を持つ
とどまらぬ生命の移りこの溪の紅葉ま紅く彩
の冴えたる

相野谷森次

* 蝶

地下駅を出で来て梅雨の残りたる五合半坂踏
み登り行く
海渡り来し幾千の蝶群れて首夏の一木たちま
ち暗む
遠くにて鳴く蛸を二、三日聞くのみにして暑
氣も衰う
捕虜の日に食として居し草の一つむらさきつ
ゆくさの苗売られおり
この夏の草取ることを怠りし雑草なかに菊咲
きそめぬ

相原恵佐子

花梨

流雲をかき廻しつつ枯枝が素描する如し花梨
の枝が
条福に黄庭経を書きつらねこらへゐるおもひ
鎮まりゆけり
をどらずに書けしことのみは佳しとせむゆっ
くり墨を切りて筆置く
菊膳つくりて人数に合はせつつ若やぎて来む
客を待ちをり
会合の中止となりし日の午後をガス台の汚れ
隅なく拭ふ

相原健一

坂

足元のみ見て来た我の一世かと落葉かけぬけ
る坂道下る
繕ひの針持つほどに癒えし妻心を若く吾が衣
縫ひてよ
嗅覚の衰ふらむか木犀のこまかき花を見上げ
てさびし
物言はぬひひなの並ぶ夕の部屋ひとりポット
のぬるき茶を呑む
ジャンパーの孫は大人の声となり背くらべに
寄る吾を見おろす

四十物弘明

五首

家持が鳥と総と立て伐るとふ歌の能登の熊木ぞ船
木伐る土地

雪搔けば根雪の下に糸菊の淡紅の花あな生き
てゐる

うつむきて六弁の一花ひそと咲く佗し堅香子
の薄き紫

春の雲いづこへゆかむ濠の辺の裸婦ブロンズ
に淡く翳りて

初釜の奥なる壺の静かなり定まる位置に像と
とのふ

青木朝子

* 花びら傾ぐ

湯の中にひらく桜の花びらが傾ぐと寄りて唇
に近づく

水無月の彼岸の母のうしろ髪ひきつつひぐれ
喚ばわむとする

みずみずと棘ひかりくるバラ一輪冷えしめが
ねは卓に置くべし

ひと房に髪を束ねて背に垂らすあまた余罪を
あつむるごとく

域ひとつ越えしばかりに負を重ね首夏茫々と
さぶしきものを

青木梅代

いのち

誘はれ家事はさしおき梅雨の晴れ間花菖蒲見
むと心ときめく

丹沢の麓の園にもとめ来しむらさき菖蒲豪雨
に立てり

子らの名を呼び違へては老い夫の己いぶかし
み空ろに笑ふ

唐突に鈴木君などあらぬ名に己が子を呼び夫
は病みをり

墜落の利那思ひぬ蒼き海真下に見つつ降りゆ
くバスに

青木きね夫

史のひとこま

農政は揺り動けども季来ればすがし水田に人
ら苗植う

傷つけど獅子は王者の威を保ち技うつくしく
イッポンで勝つ 山下泰裕選手

ただひとつ「ウチヘカエル」といふ日本語を
覚えてゐたりし中国の孤児

毛羽さきに触れしかそかな鉄錆の文字一一五
が古代史を変ふ 稲荷山鉄剣

みな底の通ぜし今日も渺々と津軽の海の波は
かはらず

青木九二平 あおきくへい

遺作展

死期にちかき予感に挑み描きたらむ画と思へば釘づけらるる

思想もつ画なりと思ふ蒲原のみぞれする季の夕焼くる景

をちこちに榛描かれゐて暮れのこる農夫を牛を温く見守る

蒲原の風土をいとも澄明に描きて果てけり佐藤哲三

遺作展いで来て佇ちし城壕の噴水の輪に秋の虹たつ

青木幸一郎 あおきこういちろう

黒き床土

水撒けば湿りて黒き床土にグリーンのアスバラひときは映える

適温の二十五度を保つむづかしさ暑くてもならぬまた寒くても

アスバラの出荷はじまりて農協の集荷所ふたび活気を増しぬ

若き日を戦争の中に過しきて働くことしか知らぬこのわれ

二十年の労報はれていま受くる農林水産大臣の賞重かりき

青木祥太 あおきしょうた

花の闇

夕ぐれの時のあはひはたちまちに闇となりゆきはのぼのと花

はかな心抱きて時を過ごすのみ揺れつつ花は暗し眩ゆし

快樂など吾れの願はぬは何時よりか花を暗しと仰ぐある時は

桜花かがやく下に父と子と淋しむ如し生命といふを

吾れさへや生きむ命と思ふかなかはたれの闇に花は散りつつ

青木平三郎 あおきへいざぶろう

老柳のごと

漠々と老柳のごと生きなんか浮世の風も天のしらべぞ

不正不義闘ひつゝも吾は行く弁護士の道荆の道ぞ

正をふみ天地の大道歩みをり怖るゝはたゞ神の裁きぞ

弁護士法一条をふみて吾は今社会正義の実現目ざす

今宵いま静かなねむり与へませ神に祈りぬ八十路も近し

青木美沙子 あおき みさこ

窯閉つ

窯どめの祭事に会員集りて今年最後の貌を撮らるる

土こねて焼く野の末の窯どころよく通ひしよ暑かりし夏を

残り粘土背負ひて帰らむ凍む故に冬場を閉ざす山際の窯場

窯閉ちて年忘れ会すと集ひたりいささかの酒肴に和みゆく座か

酒少し入りて饒舌になりしひとの窯変のことを自慢げに語る

青木泰子 あおき やすこ

孤愁

幾年を夫に尽して務め終ふ握りゐし手を静かに解くも

夫の眠り死に繋がるとは知らざりき吾の迂濶を今にし思ふ

何処にか濁み声高き寒がらす 吾は喪服を脱ぎしばかりぞ

秒針に狂ひなければど吾を避けて喪の正月はひとと逝くらし

信ずるとふ事の脆さはさびさびとやがて散りゆく鉢の白梅

阿川千恵子 あかわち えこ

* 甲斐路

亡母の齢はるかにこえて在る今を幸というかはかなかりける

バサッと羽音たてゝとび立つ鶴の行く方既に春の空なる

咲き明る白き牡丹は二十一おのもおのもの翳りをもつて

なまよみの甲斐路の晚き春を行く八重の桜の色もの憂き

遠つ世の葬りの場に流れしか松の横笛のまろき音を聞く

青野うた あおの

老化

当然の且つ必然のことなりとおのが老化に眠そらさじ

少しづつ衰へてゆく過程をば日日鮮しと我は思はん

みどり児が生長しゆく逆にして老いゆくことも楽しかるべし

薬ぬりコルセット締め身じまひす我が自己愛の静かなる時

動作にぶりたるにもよらん何かにと用事がありて一日保たる

青野智道 あおの ちどう

草若葉

宗祖道元禪師みまかり給ひしは五十四歳同年
にわれは教職を退く
草若葉に照る日浴みつつ思ひゐるなほ果した
き願ひの幾つ
二夜三夜賑やかにがまが産みゆきし卵が池の
底に孵れり
幼きはがまの子すらもあどけなし犇めきて池
の縁にかたまる
朽葉積もる池水浅く日の透きて井守ふはりと
時折泳ぐ

青柳絢子 あおやぎ あやこ

いつよりか

コスモスの揺るる鄙びし駅過ぎて旅の心とな
りゆく我か
原爆に拘はる童話に涙する我を幾度び見上ぐ
る孫は
旅恋ひて来し湯の宿に淋しさを一人かみしむ
遠山の雪
バス停のベンチの埃り払ひつつ春来し思ひ胸
に拡ぐる
アカシヤの枝垂るる坂いつよりか舗走路とな
り白き日返す

青柳節子 あおやぎ せつこ

コシヒカリ

クレパスの陰 かぐろき北極圏氷原は人棲ま
ぬ浄ききはまり
午前八時いまだ明けざるバリ市内「日出づる
国」の女とまどふ
日本語のわからぬメイドにスペイン語を知ら
ぬわが乞ふ解熱の薬
鞆袋負ひて夕べを帰り来しロバが厩舎に入り
ゆくところ
マドリッドへ戻りたる夜は日本より持ち来し
炊飯器に炊くコシヒカリ

青柳 猛 あおやぎ たけし

桜

街中の公園に来て夕ぐれの喧騒に散る桜みて
立つ
ひとときのやすらふゆとり葉桜の風に撓へる
舗道を歩む
うちなびく桜吹雪とまごふまで唐松林に降る
雪しぐれ
収穫の甘藍を積むトラックが桐の花咲く丘下
りゆく
製材を終へて積まるるトラックに湿りをもて
る木肌が匂ふ